

黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.86 (September 30, 2018)

第86号 2018年9月30日

例会発表要旨

4月例会 2018年4月28日 青山学院大学(青山キャンパス)

① 移民芸術家 Edwidge Danticat にとっての「英語」使用

杉浦 清文(中京大学)

Edwidge Danticat (1969-)は、西半球の最貧国ハイチの首都ポルトープランスで生まれた作家である。ただし、12歳のとき、彼女はアメリカに移住し、現在、「英語」を用いて創作活動が続いている。もちろん、Danticat にとって「英語」は母語ではない。そうした中、彼女が「英語」を「継母語」(stepmother tongue)として捉えようとしている点は興味深い。

しかしながら、皮肉にも、Danticat にとって、「継母語」を使用できるという、まさにその境遇が、自分自身の立ち位置を絶えず責め立てることにもなる。12歳のときにデュヴァリエ独裁政権下のハイチからアメリカに移住＝「逃避」してきた Danticat は、その「罪の意識」をそう簡単に掻き消すことなどできない。彼女は、「継母語」を使用して、故郷から遠く離れた場所に住んでいる／住むことのできる、いわゆる「ジャスポラ」(Diaspora)と名指される存在であることの意味を強く認識しているのである。たとえば、その様子は、*The Butterfly's Way* (2001)において書かれた Introduction の中で窺い知ることができるだろう。けれども、注目すべきは、それから9年後に、Danticat がその Introduction に加筆修正を施し、それを *Create Dangerously* (2010)の中の一論考として改めて掲載した点である。なぜ彼女はそうする必要があったのだろうか。そこには、「ジャスポラ」としての立場を繰り返し問い続けようとする Danticat の姿が見てとれるのではないだろうか。彼女は、今も、そしてこれからも「ジャスポラ」という言葉の重みを感じ取っている／いくに違いない。

本発表では、「継母語」である「英語」を積極的に使用し続ける Danticat の痛ましくも未来志向的な素顔を浮き彫りにしようとした。いずれにしても、Danticat にとって、「英語」で作品を創作し続けることは、「ジャスポラ」として、さらには「移民芸術家」としての自分自身の立場を絶え間なく問い質すことにもなるだろう。

② トニ・モリスンの *The Origin of Others*(2017)を通して考える他者排除のメカニズム
——次世代に継承されるモリスンのメッセージ——

森 あおい(明治学院大学)

本発表では、トニ・モリスンの『他者の起源』(*The Origin of Others*)を取り上げ、モリスンが詳らかにする他者排除のメカニズムについて論じた。

同書は、公民権運動から半世紀が経ち、黒人として初めてアメリカ合衆国大統領に選出されたバラク・オバマが大統領を2期務めた後も、依然と存在するアメリカの人種問題を扱っている。モリスンは、人間が異質な存在である他者に対して恐怖心を抱き、それが排除の理由となる状況を批判している。

特に『他者の起源』の最終章「外国人の家」では、グローバリゼーションが進む現代社会において、異質な他者を排除する仕組みが複雑化し、さらなる差別を生み出す様子が描かれている。人種のみならず、宗教、政治、階級、ジェンダー等、異なった背景を持つ他者に対して、搾取と排除のメカニズムが働き、それが正当化されることにモリスンは警鐘を鳴らしている。主流社会の権力の構図を問い直し、他者の存在に光を当てようとするモリスンの意図は、同書の「前書き」を著わしたタナハシ・コートをはじめとした次世代の作家に大きな影響を与えている。

「外国人の家」の概念は、モリスンが2006年にルーブル博物館で開催した特別展「外国人の家」が嚆矢となっている。この特別展では、芸術を介した人種や階級の違いを越えるコラボレーションの可能性が、彼女の基調講演やルーブル博物館の展示品等を通して示された。この「外国人の家」の特別展で示されたモリスンのヴィジョンを探求する同名のドキュメンタリー映画が、2018年には製作された。今後は映画等の媒体も含めて多角的にモリスンのテーマを掘り下げていきたい。

③ エドヴィージ・ダンティカとハイチ

佐川愛子(女子栄養大学)

私は、2001年8月に風呂本惇子先生が文科省の科研費を得て始められた「カリブ文化・文学研究集会」に参加した際にダンティカの作品に出合って魅了され、彼女の作品を次々に読んでいった。2003年8月、ハイチ大使館と現代企画室の共催で開かれたイベント「エドヴィージ・ダンティカを囲んでハイチ文化を楽しむ夕べ」で通訳を務めたのを機にメールのやりとりをするようになったので、暫くして、その頃ちょうど執筆していた *The Farming of Bones* 論を書き上げ、英訳して送った。すると、「素晴らしい。とても感動しました。注意深く読んでくださって感謝します。あなたの知的解釈をととても楽しみました」と言ってくれた。その後はダンティカ作品の翻訳に力を入れ、これまでに *Brother, I'm Dying*、*The Farming of Bones*、*Create Dangerously*、*Claire of the Sea Light*、*UNTWINE* を翻訳出版してきた。どの作品にも冒頭にダンティカからの「日本の読者への手紙」が載せられている。当例会では、こうした経緯とこれらすべての作品の精髓を簡単に紹介し、作品の内容に密接に関わるハイチの歴史、殊にそのアメリカとの関係史に言及し、「西半球の最貧国」と言われるハイチの窮状に対するアメリカとフランスの責任を正しく指摘しているチョムスキーの言葉も配付資料として紹介した。さらに、トランプ政権発足以降の DACA の撤廃方針決定、トランプ大統領のハイチの出身者は「全てエイズ罹病者」発言や、TPS の停止に関する議論のなかで飛び出した「汚い便所のような国」発言などに対するダンティカのスタンスと、静かなしかし力強い言葉も紹介した。そし

て最後に、2015年の私個人のハイチへの旅を、写真を見て頂きながら、報告した。

佐川氏発表、関連写真



写真 1. エドウィージ・ダンティカと共に



写真 2. 学校での給食調理



写真 3. 道端のマーケットの風景



写真 4. 歩く以外の移動手段



写真 5. 橋がないので川は歩いて渡る (以上、写真提供: 佐川愛子氏)

報告

会員による出版

古川哲史・三浦誉史加・井上摩紀共訳(ジェフ・バーリンゲーム著)、『走ることは、生きること——五輪金メダリストジェシー・オーエンスの物語』(点字版)、視覚障害者生活情報センターぎふ、2017年、254ページ(全2巻)。

* 本書は、同書(晃洋書房、2016年版)の点字図書。

Asaka, Ikuko. *Tropical Freedom: Climate, Settler Colonialism, and Black Exclusion in the Age of Emancipation*. Duke UP, 2017.

会員からの投稿

留学体験記—あるいは、なぜ黒人研究を学ぶのか

山田優理(カリフォルニア大学ロサンゼルス校・院)

「なぜ黒人研究をするのか。」という問いには少なくとも2つの異なる、しかし関連した問いが含まれている。一つは、どのようなきっかけで黒人研究を専攻するに至ったか。もう一つは、黒人でない者が黒人研究をする意義は何か、である。黒人研究を学問として学ぶきっかけとなったのは、学部時代に機会を得たニューヨークへの語学留学である。と言っても、勉強など全くせずに音楽に没頭していた為に成績は最悪で大学を通して正式に留学することなど考えもしなかった。留学の目的は学問ではなく、音楽であった。また、大学で出身都道府県の異なる多くの友人と交流するなかで、京都以外に住んだことも通学に公共の交通機関を用いた経験もなかったそれまでの自分の世界の狭さを痛感していた。以上の理由からニューヨークを留学先に決め、大学を一年と半年休学した。半年間、ほぼ毎日派遣のバイトをして貯蓄し、さらに親にもいくらか世話になることで一年弱をニューヨークで過ごすことになった。もちろん英語など話せるはずもなく、最初の数週間は特に苦労を強いられた。それでも、ジャズにハマっていたので、良質の演奏を提供する店のあるハーレムに住むと決め、掲示板や不動産仲介業者のウェブサイトですべて部屋探しをした。めぼしい物件を見つけ、実際に現地へ出向いてドアをノックし、出てきた男性に拙い英語で空き部屋があるか尋ねるとニューヨークで部屋を探している理由を聞き返された。大学を休学していることやジャズが好きであることを述べると「コルトレーンは好きか。」ときたので「もちろんです。」と答えると部屋を借りられることになった。幸いなことに家主である元バス運転手と芸術家の夫婦とはすぐに親しくなり、時間を見つけて色々な話をする関係にまでなった。玄関横の窓に飾られていたハリエット・タブマンの肖像画について尋ねたのがきっかけで1960年代にはネイション・オブ・イスラムのメンバーであった夫婦から黒人史についても多くを学んだ。それまで関心のなかった米国の政治や歴史に興味を持つようになったのは、高い政治意識と優れた芸術感覚を持つ彼らとの交流を通してであった。今日でもこの夫婦とは連絡を取り続けており、サンクスギビングを共に過ごす事も多い。このように書くと転機が突如として訪れた印象を受けるかもしれないが、いかなる事象であってもそれが表面化するまでにはいくつもの出来事と過程、George Lipsitzの言うところの“the long fetch of history”がある。こう考えると、歴史に触れることの出来る京都という場所で生まれ育ったことや父が反戦運動や水平社運動に関わっていたことも黒人研究ないしアメリカ史を学ぶきっかけであったのだろう。

もう一つの問い—黒人でない者が黒人研究をする意義—に対する答えは、それが我々が生きる近代の成り立ちを浮き彫りにするからである。Lisa Loweの*The Intimacies of Four Continents* (2015)が論証するように、ヨーロッパにおける古典的自由主義(classical liberalism)の登場は、土地をはじめとする収奪された資源や植民地化ないし奴隷化された

人々の強制労働と密接に関わっている。つまり、17世紀～19世紀にかけてアダム・スミスやジョン・ロック、またジョン・スチュワート・ミルらによって提唱されたリベラリズムという経済・政治思想そのものを可能にしたのはこれらの人々の従属および搾取であったのであり、また彼らの掲げる自由(liberty)が奴隷や先住民といった虐げられた人々に付与されることはなかった。この意味で近代におけるリベラリズムは、植民地主義や奴隷制、資本主義、帝国ないし国民国家の発展に加担したと言えよう。人間の合理性、市民権や経済的自由の保障を唱うリベラリズムの根幹を成すのは、あらゆる干渉からの個人の自律、すなわち消極的自由(negative freedom)という考えであり、ここで言われる自由とは個人の財産権に他ならない。個人の自由の名のもとにイギリスを始めとするヨーロッパ諸国では困り込み運動が起こり、産業化が進展し、そして自由市場が促進された。これらの権利が奴隷や先住民に保障されることが無かったばかりか、むしろ奴隷は個人の財産であると見なされたのであり、人道(humanity)および人権(human rights)の普遍性(universality)を唱うリベラリズムの恩恵は文明や人種を理由に拒否された。アメリカ大陸におけるセトラー・コロニアリズムにしる、大西洋奴隷貿易にしる、その非人道性を擁護する為にこれらのプロジェクトの犠牲者は人間とは見なされず、その暴力性は人種というロジックによって正当化された。近代以前のヨーロッパに既に浸透していた人種化(racialization)という概念と慣習が、人種主義(racism)として資本主義の発展の根幹を成していたことは、W.E.B. Du Bois の *Black Reconstruction in America*(1935) や C.L.R. James の *The Black Jacobins*(1938)、Eric Williams の *Capitalism and Slavery*(1944) などの古典、そして UCLA の大学院生がバイブルのように読んでいる Cedric Robinson の *Black Marxism*(1983)が明らかにしている。つまるところ、全ての人間の解放よりも個人の財産権を優先するリベラリズムは人種とジェンダーに基づいて分類された人間の従属と搾取を容認してきたのである。そして 1940 年代に提唱され、1970～1980 年代にかけて世界に広がった、市場原理主義を唱える新自由主義(Neoliberalism)とそれが生み出す経済格差および貧困層や有色人種の犯罪化といった現象もこの系譜に鑑みて把捉すると、新自由主義は“新”らしくなどなく、リベラリズムであると指摘することも出来よう。

近代におけるリベラリズムと人種主義の関係から得られる知見を二点挙げたい。一つは、人種とは主としてアイデンティティではなく抑圧の形式かつ構造であること。もう一つは、黒人研究が人間の解放を目指す学問であるならば、リベラリズムに替わる思想と実践が必要であることである。一つめは特に UCLA の学部生を相手に授業をしていて感じることだが、彼ら・彼女らにとって人種やジェンダー、セクシャリティはアイデンティティであり、とりわけ人種とは肌の色とそれに基づく属性や文化を意味する。言うなれば、フィクションとしての人種をポジティブなものとして内面化しているのだが、人種という概念の持つ曖昧さや脆弱性—Cedrick Robinson が言うように、レイシャル・レジームや白人優越主義は虚弱なので絶えず自らを作り変えなければいけない—が抜け落ちているばかりか、多くの場合、歴史的視点が欠如している。但し、アイデンティティが重要でないなどと言いたいのではない。Gayatri Spivak や George Lipsitz らの言うところの「戦略的本質主義(strategic essentialism)」に倣い、アイデンティティを用いることで何らかの活動や社会運動に繋げることは可能であるし、より公正な

世界を想像・創造するのに必要な過程であることに間違いはない。一方で、その影響力に限りがあことは Stuart Hall も指摘している。もちろん、このような限定的かつ固定化された人種概念を持つ学部生を咎めるつもりなど全くなく、むしろここ数十年に渡って米国のキャンパスや職場でしきりに言われてきた多文化主義—それは多くの場合、パワーに対抗しないかたちでの多様性の受け入れを意味する—の影響もあるはずである。人種とは何よりもまず構造的抑圧の形式であるという全体像を常に掴んでおくことの重要性を自戒を込めて強調したい。二つ目のリベラリズムに取って替わる思想であるが、幸運にも先人たちが優れた研究書を我々に残してくれている。Du Bois は彼のよく知られた再建期の研究においてそれを Abolitionist Democracy と呼び、Cedric Robinson は Du Bois, C.L.R. James, Richard Wright の生涯と作品に Racial Capitalism に対抗し得る Black Radical Tradition を見出した。また Clyde Woods はミシシッピ・デルタにおける抵抗の歴史の根底にある黒人労働者階級を中心とした人々のインディジナスな知のあり方を Blues Epistemology と名付けた。総じて、それは奴隷やワーキング・クラスといった周縁に置かれた人々が生き残りをかけた日々の闘争のなかで生み出した、個人主義よりも集団性に重きを置く意識と運動であり、より民主的な思想と実践であると言えよう。先に挙げた問題を内包するリベラリズムとは根本的に異なるこれらの思想体系に学ぶところは多い。

「日本人が黒人の歴史や文化を研究する必要があるか。」という問いに対する答えは必ずしも「日本にも同じような状況がある。」だけでは無いし、ましてや「黒人でないからこそ得られる客観性がある。」では決してない。客観性などあり得ないうえに、この考えはともすると人種問題の解明と解決に知行合一で取り組む研究者や知識人、活動家を軽視することにも繋がりがねない。Walter Johnson は学者がエージェンシーをやたら強調したがる傾向を善意の売込みだと批判したが、客観性を力説する行為もこれと同様なものかもしれない。そうではなく、我々が生きる世界の基礎を成す矛盾に満ちた構造と抑圧の様式、そしてそのような構造のなかでの生き残りや抵抗のかたちと過程を理解しようと努め、より公正な社会のあり方を模索するからである。この意味で、非黒人が黒人研究をすることは文化の盗用ではない。また、合衆国憲法修正第 13, 14, 15 条が様々なマイノリティによる権利獲得運動において重要であったように、黒人の抵抗や社会運動がもたらした権利や変革は黒人の為だけではない。あらゆる人間の解放を目的としているのである。さらに言うなれば、それは人間にとどまる話ではない。Fred Moten が度々指摘する通り、所有欲の強い個人を基盤とするリベラリズムの伝統が地球をまるで人間の所有物であるかのように扱い、環境問題が深刻な現代において、黒人研究の最大の目的は我々の暮らす地球という惑星を守ることであろう。以上のような理由から、「日本人が黒人の歴史や文化を研究する必要があるか。」と聞かれた際には「機会さえあれば、誰もが黒人の歴史や文化を研究するべきだ。」と私は答えるようにしている。

留学体験記関連写真



写真 1. The Undercommons の集まり (詳しくは、Robin D.G. Kelley, “Black Studies, Black Struggle,” *Boston Review* 参照)



写真 2. Women's March in Downtown Los Angeles (2017 年 1 月)



写真 3. Powell Library



写真4. ニューヨークで部屋を借りたアパートの家主



写真5. UCLA キャンパスで命を落とした Bunchy Carter と John Huggins
2名のブラック・パンサー党員のための記念碑、UCLA キャンパス内
(以上、写真提供: 山田優理氏)

入 会 者

氏名: 國友淑弘 (くにとも よしひろ)

所属: 桜美林大学芸術文化学群 (非常勤講師)

自己紹介文: 昨年度、立教大学大学院キリスト教学研究科で神学博士の学位を取得しました。今まではアフリカ音楽に由来する黒人霊歌の即興性について研究を行ってきました。研究と同時にゴスペルの指導を行っており、神奈川県にある米軍基地内の黒人教会との交流を始め、各地でゴスペルクワイアの演奏活動も行っております。キリスト教音楽における黒人宗教音楽独自の思想と演奏法、更には日本のゴスペル需要について探っていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

氏名: 福島 昇 (ふくしま のぼる)

所属: 日本大学大学院

自己紹介文: 1951 年生まれ。法政大学卒業。日本大学大学院博士課程修了。現在、日本大学大学院講師。専門はシェイクスピア、比較文学 / 影響と受容。論文「トニ・モリスン『青い眼がほしい』における シェイクスピア『ハムレット』の受容 —— 『私たちのイノセンスも死んだ』』『国際文化表現研究』14 (2018)、「ビクトール・セジュール『セビアのユダヤ人』におけるシェイクスピア『ヴェニス商人』の受容について」『異文化の諸相』36 (2015)、共著「“You were not killing me. You were killing Othello” —— トニ・モリスン『デズデモーナ』論」(成美堂, 2013) など。

氏名: 有光道生 (ありみつ みちお)

所属: 慶應義塾大学・准教授

自己紹介文: 20 世紀以降のアフリカ系アメリカ文化(小説、自伝、詩、ダンスなど)を中心に、人種・民族表象、ナショナリズム、コスモポリタニズムについて研究してきました。特にマイノリティ作家による「世界文学」を(再)構築する取り組みに関心があります。現在は、アフリカ系アメリカ人作家・知識人によるアジア表象をテーマとした単著を準備しつつ、戦後日本の作家、芸術家、研究者がいかに「黒人文学」・「アフリカ系文化研究」を構想し、アップデートしてきたかについても調べております。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

(順不同)

編集後記かえて

今回の86号も例会の要旨と留学体験記の編集をする過程で多くの刺激を受けるものとなった。また、前号から視覚的にも楽しめるようにと写真を掲載するようにしたわけだが、今回、佐川氏からは発表時にご紹介いただいたものの中から、そして山田氏には学期中のお忙しい中キャンパスの写真を撮影してご提供いただいた。いずれの写真も本会にふさわしく、生き生きとした人間生活の営み、強さ、そして人生のあり方を強く訴えかけてくるものばかりである。読者方々もこれらを存分に感じていただけたと思う。

さて、前号を発行後の4月から7月にかけて、私のいる京都ではイベントが盛りだくさんであった。『私はあなたのニグロではない』(原題: *I'm not Your Negro*)の公開、プリンストン大学のイマニ・ペリー氏が学部生を連れて来日し、講演会や学生との交流会、ミシガン州立大のデイヴィッド・ストウ氏による講演会など知的刺激が強く、密度の濃い日々であった。どれも濃密で良い経験であったが、プリンストン大学の学生との交流会は特に印象深い。彼らの知的好奇心と造詣の深さには驚かされたと同時によい刺激になった。

現代はネット環境の発達とSNSという便利なツールのおかげで、この交流も一過性のもではなくなっている。反面、直に対話する空気を感じたいと望むことも多々ある。インターネットやSNSは他者との距離は縮めてくれるものの、緊張感や情熱といった肌で感じる空気感はない。願わくは、近い将来また彼らと議論を交わしたいものだ。

まだまだ力不足の身ではあるが、今後も精進して会報の発展に尽くしたいと考えている。会員の皆様のご助言、お力添えを是非ともお願いしたい。

(猪熊 慶祐)

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞ 猪熊 慶祐
gr0313sp(a)ed.ritsumei.ac.jp
ホーム・ページアドレス
<https://kmmstshuji.wixsite.com/jbsa>